チョウたちの時間

山田正紀

角川文庫

チョウたちの時間

山田正紀（やまだまさき）

角川文庫 4609

昭和五十五年五月二十日　初版発行

発行者――角川春樹

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一一（大代表）

〒一〇二　振替東京③―一九五二〇八

印刷所――大日本印刷　製本所――本間製本

装幀者――杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-14607-0946 (o)

チョウたちの時間

山田正紀

角川文庫 4609

目次

プロローグ　五
第一章　時は過ぎゆく　一三
第二章　時はとどまり　八〇
第三章　われらは過ぎゆく　一五九
エピローグ　二六二
拝啓　山田正紀様　川又千秋　二六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

プロローグ

夏だった。

ぼくはいつものように、朝、家を出ると、図書館に向かった。

バスに乗って三十分ぐらい、図書館のあるT―神社に着いたときには汗ビッショリとなっていた。

公園はひろく、茂った樹々がちょっとした森のようになっていた。梢をわたる風はさわやかで、ほてった肌にヒンヤリと心地よかった。

遠くのプールから、子供たちのはしゃぐ声がきこえてきた。

すでに、図書館のまえの石段には、学生たちが列をつくっていた。ほとんどが受験生で、小脇にバンドでたばねた参考書をかかえている者が多かった。なかには、こうしている間も惜しいというように、英語の単語帳にしきりに読みふけっている者もいた。

ぼくは列の最後尾についた。

あつかった。
まだ朝の十時まえだというのに、気温はゆうに三十度をこしているように思われた。そうして立っているだけでも、全身から汗がふきだしてくる感じなのだ。
日ざしが強烈で、アスファルトの道路を燃えあがらせているようだった。強い照りかえしに、思わず眼をとじると、瞼のうらに赤く、青く、ちらちらと光の輪がおどった。
セミの鳴き声がうるさく、鼓膜にはりつくみたいだった。
やがて十時になり、図書館のドアがひらいた。
受験生たちは従順なヒツジのように、ひとりひとり図書館に足をふみいれ、入り口で待ちかまえている係り員から整理カードをわたされた。整理カードには数字が記されていて、それがそのまま利用者たちの座席番号になるのだった。
ぼくの座席番号は二五一だった。
二階の、読書室だ。
ぼくは二階にあがり、座席につき、参考書とノートを机のうえにひろげた。
今日は、苦手な数学を重点的に勉強するつもりだった。そのつもりだったが――しばらく、ノートの空白をにらみつけているうちに、眠気がおそってきた。
いつもこうなのだ。

クーラーのほどよくきいた読書室にすわり、ノートに鉛筆を走らせる音を耳にしていると、自然に眠たくなってしまうのである。

よくないこととは思うのだが、図書館にくるのも、半分は昼寝をしたいからのような気がする。冷房のきいた図書館でうつらうつらとするのは、まったく気持ちがいいのだ。

（午後にいっしょうけんめい勉強すればいいじゃないか……）

ぼくはそう自分にいいきかせると、そのまま机に顔を伏せた。

――気がつくと、もう昼食の時間になっていた。

まわりの学生たちの数もだいぶ減っている。勉強を中断して、それぞれ下の食堂におりていったのだ。なかには、家から持参したサンドウィッチをほおばりながら、参考書をにらみつけている奴もいたが、さすがにその数は多くなかった。

ぼくはといえば――もちろん、なんのためらいもなく、下の食堂におりていった。

図書館の食堂だから、できるものはかぎられている。A定食、B定食、ラーメン、カレーライス……だいたい、そんなところだ。

ぼくはB定食をたのみ、それだけでは足りないような気がしたので、いなり寿司をいくつかとり、食事をはじめた。

午前中は寝ただけなのに、けっこう腹が減っていたらしく、きざみキャベツの最後の一本まで

もきれいにたいらげ――それでも満足できずに、カレーパンを一個追加した。

そして、セルフ・サービスのお茶を飲みながら、ボンヤリと窓の外をながめた。

窓の外は、夏だった。

そうとしか表現しようがない。

みずみずしい樹々の緑が、陽光をキラキラとはじいていた。公園の喫茶店の軒先につるされた〝氷〟の旗が、いかにもものうげに揺れていた。公園の外の道には、奇妙に遠い感じで、黄いろいバスが走り、ミニ・スカートの娘たちが歩いていくのが見えた。

窓の外をながめているうちに、ぼくはフッとおかしなことを考えた。

この瞬間は、このときかぎりのものであるが、しかし永遠にここにありつづける、というようなことを考えたのだ。……ぼくたちは錯覚しているのだが、時間は決して過ぎ去っていくものではない。どんな短い瞬間にしても、永遠の一部であることに変わりはなく、そして永遠という言葉が不滅を意味しているのであれば、瞬間もまた消滅してしまうはずがないではないか。

そんなことを考えたのである。

時間はつねにそこにありつづける。うつろい、変化していくのは、時間ではなく、ちっぽけな生き物であるぼくたちのほうなのだ、と……

今、この瞬間、ぼくが眼にしている夏の光、耳にしているセミの鳴き声は、永遠にここにとど

まる。そして、ぼくだけが老いていき、死んでいくのだ。

もちろん、あとになって想いかえせば、陳腐な、とるにたりない考えにすぎなかったかもしれない。しかし、そのときのぼくには、それはひどく新鮮なおどろきと、なにか甘ずっぱいような悲しみをともなった考えだったのである。

ぼくは呆然として、しばらく窓の外を見つめていた。

気がつくと、食堂にはめっきり人の数が少なくなっていた。昼食の時間はとうにすぎ、勤勉な学生たちは勉強にもどっていったのである。

ぼくは午前の時間をいねむりですっかりつぶしてしまっている。午後には、なんとしてでも参考書の一ページなりと読み進まなければならない。そうでないと、こうして図書館まで来た意味がないではないか。

ぼくはあたふたと食堂を出ていった。

だが、――机のまえにすわっても、どうしても勉強に身が入らなかった。なにかひじょうに崇高な真理にふれたような気がして、数学などいまさら勉強するつもりになれなかったのだ。

むろん、錯覚だった。ぼくは、たんに興奮していたにすぎないのだ。

それでも、三十分ほどは、机のまえにすわっていたが、参考書の問題をただの一問もとくことができなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ぼくはついにあきらめて、机からはなれ、図書閲覧室のほうへ歩いていった。
気分転換に、ミステリーでも読もうかと考えたのだ。
閲覧室はひろく、うす暗かった。
天井ちかくに嵌めごろしの窓があるのだが、巨大な書架が光をさえぎり、長い影をあちこちにのばしていた。針のようにほそい光が、本のあいだからさしこみ、ただよう埃を浮かびあがらせていた。
ぼくは書架のあいだをあてもなくうろつき、眼についた本を抜きとり、二、三ページ読んでは、また元にもどすということをくりかえしていた。
なんの気なしに抜きとった詩集の、たまたま開いたページの一節が、ぼくの眼を引きよせた。
そこには、こう書かれてあったのだ。

時は過ぎゆくとなんじは言うのか。
さにあらず、ああ、時はとどまり
われらは過ぎゆく。

作者の名前は、オースチン・ドブソンと記されてあった。

その詩は、ついさっきまでぼくが考えていたことと、同じことをいっているように思えた。ぼくはなにかしら怖いものでも見たかのような気持ちにおそわれ、あわててその本を書架にもどした。

そして、――閲覧室の奥のほうに、白いもうろうとした人影が浮かびあがっているのに気がついた。

ぼくは眼をこらし、それが一人の少女であることを知った。少女……だったと思う。そのやわらかな体の線、微妙なかげりには、どことなく性を超越したようなところがあり、豊かな髪がなければ、少年に見えないともかぎらなかった。

もちろん、見知らぬ少女だった。見知らぬ少女だったが、――ぼくは奇妙に強く惹きつけられるものをおぼえた。

内気なぼくは、同級生の女の子と顔をあわすのさえ苦手だった。それが、自分でもふしぎに思えるほど、その少女をジッと凝視しているのだった。

なにかおののきにも似た、それでいてなつかしくてたまらないような、一種説明しがたい感動が、ぼくの胸をしめつけていた。

少女は、鏡に映っているかのように存在感が希薄だった。そこにいるように見えて、実ははるか遠くに身を置いているみたいなはかなさが感じられるのだ。

ふっと、閲覧室の書架が、水の波紋がひろがっていくように、ぼくのまわりから遠ざかっていくのを感じた。すべてのものが、その固い外殻をやぶって、大気ににじみ、ゆらめき始めたみたいだった。

少女がゆっくりと足を踏みだし、ぼくに向かって腕をさしのべた。

ぼくはなにかにとり憑かれたように、反射的に腕をのばして、少女の手をにぎった。

ヒヤリとした、冷たい感触が少女の手から伝わってきた。

ぼくは眼をとじた。なぜか、眼をとじずにはいられなかったのだ。

——気がついてみると、少女の姿はもうどこにもなく、ぼくはただ呆然と閲覧室に立ちつくしていた。

ながい夢を見たあとのように、頭の芯にかるいうずきをおぼえた。

ぼくはソッと掌をひらいた。

そこには、チョウが……

第一章　時は過ぎゆく

1

トボット（Time Robot）が、〝純粋時間〟の海をつき進んでいく。
時間粒子をかきわけ、ゆっくりとつき進んでいくのだ。
後方へ？　――いや、〝過去〟に向かっているのだ。
〝純粋時間〟の海には、青い光が満ちていた。
トボットは、その青い光のなかを、あたかも一隻の小型潜航艇のように進んでいく。時間粒子を後方に押しやり、超高速粒子を水泡みたいに残しながら、ひたすら〝過去〟に向かっているのである。
〝純粋時間〟の青い色――その色は、われわれの世界の色彩とは似て非なるものであった。
空間における色彩が、人間の眼、人間の意識を通じてしか存在できない、いわば主観的色彩であるのに比して、これは純然たる客観的色彩なのだった。
空間においては、色素分子は四十～五十ぐらいの原子からできている。そのさまざまな構造形

態によって、ある波長の色を吸収し、ある波長の色を反射する、ということが決定されるのだ。

そして、――ただ、それだけのことだ。

空間に身をおくものにとって、色彩はさほど重要ではない。世界がたんに明暗だけで構成されていても、それほど不自由を感じないにちがいない。

じっさい、空間に生きる生物の多くが、色彩を知覚していない。それなりに進化をとげた人間は、かろうじて色彩をみわけることができるが――それにしても、色彩の一属性を知っているにすぎないのだ。

〝純粋時間〟に身を移したとき、はじめて色彩のなんたるかを知ることができる。

それは、徹底した客観性……主観の入る余地のない、まったくの客観性なのだった。

人間の進化が停滞せず、空間のくびきから脱して、〝純粋時間〟に入ることができたなら、その認識論は大きく前進するはずだった。

かつて仏教徒は、物質と精神を五類に分けた。その「五蘊」のうちルーパ、はからずも色と訳された、まったく客観的な対象がここにはすべて存在するのである。

ここ〝純粋時間〟では、いかなる歴史学者、思想家も異をとなえることのできない、歴史そのものを見ることができるのだ。

それが、空間に対応する色彩と、〝純粋時間〟に対応する色との、唯一の、しかし大きなちが

いだった。

その〝純粋時間〟の青い光が揺らめいている。

空間的な最小単位は$\frac{1}{10^{13}}$センチ……つまり、陽子もしくは電子の有効直径である。その空間最小単位を光が通過するのに要する時間、$\frac{1}{10^{24}}$秒が時間粒子の値だった――その時間粒子が、やわらかく、しかし強靭なゴムのように、トボットの前進をはばんでいるのだ。

トボットは超高速粒子を推進力にしている。$\frac{1}{10^{24}}$秒の時間粒子は、超高速粒子によって、いわばその寿命を縮められる。それが、〝純粋時間〟に乱れを与え、時間粒子に軋轢を生じさせ、トボットを空間化させるとともに、〝過去〟へと向かわせるのである。

トボットは大きさをもたない。

空間的には、存在しないと断言してもさしつかえないのだ。

ただ、超高速粒子を噴射し、いったん空間化させたときの残像が、いうならば素粒子にきざまれた記憶となって、〝純粋時間〟に残されているのだ。超高速粒子を噴射していることで、かろうじて形態をたもっているにすぎない。

過去につき進むとき、トボットはより多くのエネルギーをついやした。――たしかに、〝エントロピー増大の法則〟が支配する宇宙空間においても、瞬間的には、エントロピーが減少しつつあるような谷間が存在する。しかし、〝純粋時間〟を過去に向かうということは、その谷間を作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor